

# 紙風船の記憶

灰根子

紙風船の記憶、少女の詩

そ知らぬふり、  
ちようちようは仄暗い夕風を  
かりぬいの糸とほつれて  
陰おとす袖口からはばたいてしまった  
あかくもえるお日様まで  
いってしまつて

さめぬ血潮のまに  
わたしはとべないから  
渇く喉の味  
無地のきものと残されて  
夜かぜにあそぶ紙風船は

## 目次

---

紙風船の記憶（一）

紙風船の記憶（二）

紙風船の記憶（三）

紙風船の記憶（四）

紙風船の記憶（五）

紙風船の記憶（六）

紙風船の記憶（七）

紙風船の記憶（八）

紙風船の記憶（九）

紙風船の記憶（十）

紙風船の記憶（十一）

紙風船の記憶（十二）

間詩

紙風船の記憶（十三）

紙風船の記憶（十四）

## 紙風船の記憶(一)

---

紙風船に刻まれた皺の数だけ絶望して  
少女はいまだ少女の心臓（ココロ）のまま  
手のひらに皺を刻み込んでゆくのかしら  
飽和した記憶とともに刻み込んでゆくのかしら  
少女はいまだ少女の手のひらのまま  
転がす紙風船はしおれて吹き込む息いちわるだわ  
皺だけが刻まれる皮膚はやわらかにほだされて  
紙風船はまあるいま月には届かない  
もう日が暮れたからおうちで遊びましょう  
紙風船に刻まれた皺の数だけ絶望して  
少女はいまだ少女の心臓（ココロ）のまま  
手のひらに皺を刻み込んでゆくのかしら  
飽和した記憶とともに刻み込んでゆくのかしら  
少女はいまだ少女の手のひらのまま  
転がす紙風船はしおれて吹き込む息いちわるだわ  
皺だけが刻まれる皮膚はやわらかになじられて  
私は永遠にお空には帰れない  
もう夜が明けるけれど眠たくはないの

## 紙風船の記憶(二)

---

まあるい紙風船、手のひらをころがして  
紙の擦れる音がする  
こぼした空気は歪みを生んだ  
その窪み、  
指先がつかんだの  
いいえ、指先はつかまれて  
驚いて力を込めた  
驚いた振りをして。  
くしゃりと笑った紙風船  
拾い上げるのは別の指先  
薄紅色くちづけて  
ため息を吹きこんだ  
変わらず、紙風船はまあるい  
皺だけが重く沈んでゆく記憶の底

## 紙風船の記憶(三)

---

あどけない瞳で紙風船ころがした  
風の無い夕闇に火照る頬紛れさす  
この時分彼の人の着物も同じ  
少女の血色、もえてゐる  
声も無く、忘れられた紙風船  
つむじ風ひとつ借りて  
彼の人の足先へ主張する  
かがんでは拾い上げる指先をたどれば  
笑ってゐる顔がたそがれに見えない  
夕闇に色あせた紙風船の記憶、生まれたばかりの日の頃

## 紙風船の記憶(四)

---

「おまえ、欲しがっていたね」と  
手渡すとき包みこむ両手のひらに  
ぬくもりを刻まれた皺、  
はにかんで受けとる白い手で  
紙風船宙高くはじいては  
刻む皺、手のひらを思い出し  
落としてしまう日暮れの影  
手探りで拾いあげる汗ばむ指は  
払う埃に染められて、あの乾いた手と同じ  
けれど、こちらの手は冷たい

## 紙風船の記憶(五)

---

鼓膜に刻まれた呪詛「あなたは変わらないでね」「あなたは  
軋む骨に締めつけられ空気吐き声が出ない梅雨の頃  
雨上がりの夕暮れにつないだ手は痛く  
へこんだ胸に紙風船抱え成長をとめた、とおい日のこと  
刻まれた呪詛はうすれることなくのびゆく骨に鳴らす警鐘  
逆らえば鼓膜から爛る血は呪われて赤く意志は曲げられる  
へこんだ胸に紙風船抱え歪む骨は走ることを叶わず  
夕暮れに立ちどまり、やさしく押し潰す晴れた日のこと

## 紙風船の記憶(六)

---

十五のとき、私は死んだの。  
黄昏に吹く風が紙風船攫っていった  
誘われるまま追いかけて掴みかけては取り逃がす  
行為繰り返せばたどりつく十字路に紙風船捕まえた  
待つものもすぐに来る。  
取るに足らない国産車は気弱な男ひとり乗せて  
笑顔の私と絡めた視線、歪ませた顔醜くて  
ためらいなく身を投げ出し、目を伏せた  
頭上舞う紙風船やわらかに夕日染まる  
水たまりに音立てて落ちた気のする  
雨なんて久しく降らない秋晴れに  
抜け殻遺し、日を沈む

## 紙風船の記憶(七)

---

あら、めずらしいですね。赤一色の紙風船なんて  
緋色というのですか。これを娘に、ですか  
かわいらしいけれど血色に見えるわ。  
夕日のせいかしら影が染みに見えて  
人の泣いている顔に見える。まあいからかしら  
深い彫りは悲しい記憶の断片  
触れかけた指先がこわばって  
ごめんなさい。娘は赤色が好きじゃないの  
嘘。足早に立ち去りたくて  
きっと今頃同じ顔をしているから  
本当はいつだったくしゃくしゃに笑いたかった  
陽だまりの紙風船のように。今は暮明がやさしい

## 紙風船の記憶(八)

---

夕焼けに焦がされて立ち尽くす  
火照る頬に困惑して、けれどこの熱を失いたくなくて  
焦燥に駆け出した  
行ってしまう昼の名残をつかまえたくて  
役立たずのか細い腕をのばした  
けれど距離は縮まらず、離されることもなく  
疲弊だけが募ってゆく  
息の切れる頃、ふとよぎる色彩。  
紙風船に目を奪われ足はとまった  
その隙に、行ってしまった  
逃げられた陽の笑う風に色彩は攫われる  
私だけが夜に、置き去られた

## 紙風船の記憶(九)

---

夏の終わる風にそよぐ草はまだ青く  
けれどわずかに薫る枯れ草のにおい  
誘われて踏み入れた足枝を踏む  
音を聞く鳥たちは姿見せぬまま飛び立った  
頭上、茂る葉のまわりは少し枯れている  
踏み入れた山の奥漂う枯れ草のにおい  
ふと強まって立ち眩み枝を踏む  
音に逃げる鳥がない 虫がない  
風の音ばかり増してゆく  
翳る陽 木々のざわめき  
鼻腔漂う枯れ草のにおい  
満たされた場所で枯葉踏む  
遠くから見た山は青かった  
枯葉の音 いいえ、これは紙風船  
伸ばした手 突風に目をつむる  
転がる紙風船、手に取る人は誰もいない  
落ちた枝の折る音に鳥たちは巣へ帰る

## 紙風船の記憶(十)

---

くたびれてしまったわ。弄ばれて  
無数に刻まれた皺  
ほだされてやわらかく  
こころは破れてしまった  
まあまあ、大変  
お道具箱は何でも入っているから  
紙テープ取り出して薄く溶いた糊で貼る  
繕う箇所はここだけかしら  
吹き込む息転がす手のひら  
弾む想いで吐き出した  
茶色の染みはお兄様のこぼした珈琲  
曲線をなぞる指先も  
くたびれてしまったわ。弄ばれて  
無数に刻まれた皺  
ほだされて、やわらかい

## 紙風船の記憶(十一)

---

ほだされた着物染みついたひだまりの温度両膝が  
欲しくないわけぢゃあないが、  
そこは居心地が良いのだけれど気まぐれはくすんだ空のせい  
なでつける指の温度はりつめた緊張は血の気引かせ  
ふるえる呼吸ひとつ飛ばしたら思い出す血はあたたかい  
日常という正午の鐘におびえる指の揺れる鼓動  
たゆら眠る午睡の合間、なでつけるその指が  
皺を刻んで干乾びてもとわに。とわに。

## 紙風船の記憶(十二)

---

抽斗の奥仕舞われた、折り畳んで皺をのばして  
刻まれた記憶の爪痕  
皮膚にうすれることはなく  
けれど自我という輪郭は曖昧  
どこからか入り込む埃しみて  
依然、少女の泣き顔の  
声は笑い声に聞こえる  
あたたかな湿り気が誘う眠りまどろんで  
私のつぶやく声を聞き逃す  
折り皺とのびゆく皺がいつかまた刻まれるまで

## 間詩

---

もう知っているかしら

紙風船の赤色は少女の血色  
その鬼から頬染めて逃げ出すの

薄紅は少女の唇あどけなくうそばかり吐く

白いのは少女の指先  
かつて少女だった乾いた骨の音

きいろい野の花、いいえ葬花  
起き上がらないでと投げつける

花散って萌える緑は虫に食われるその前の色

藍の沈む水底にはきっとおそろしいものが蠢く

吹き込み口はかがみ色全てをうつして知っている

## 紙風船の記憶(十三)

---

紙風船は二つ入りだった  
私たちは双子だった  
つま先の曲がり具合から振り返る髪揺れまで  
同じ姿に同じ声  
いいえ、ほんの少し甲高く  
纏わりつく声は甘い  
あのこは先に生まれただけで  
紙風船は二つ入りだった  
小母さまからのいただきもので  
はにかんでお礼の言葉  
発すれば、  
被さる声に掻き消されうつむいた  
笑いさざめく声は遠い  
物心と隔たれて  
紙風船は二つ入りだった  
大と小の二つだった  
小さいほうが欲しかったのに  
あのこは言うあの声で  
大きいのをあげる  
そうしてあのこはほめられる  
やっぱりあのこはほめられる  
紙風船は二つ入りだった  
遊ぶときも二人だった  
変わりやすい色の風は吹きすさぶ  
先行くあのこなぶっては  
両手で髪を押さえつけ気づいた声あげる間にも  
辺りには誰もいない  
どぶを流れた紙風船  
ひとりぽっちはさみしいねと  
笑顔の指で絡めとり  
連れ帰られるあのこの家  
今日もお揃いお布団を隣に敷き詰め日は暮れる  
先眠るあのこの寝息に眠れない  
私の首を絞めてみせても安らかで  
あのこの首を絞めてみる

苦しそうな私の顔に食い込む指の痛みおぼえた  
紙風船はもうなくて  
消え入る風に目を覚ますと  
二つの色彩流れるさまを焼きつけた瞼の記憶

## 紙風船の記憶(十四)

---

いいえ、紙風船は五つ入りで  
同じものを分け合った  
あの子とその子とこの子とあの子と  
いつも仲良く遊んでいて  
また明日来ることを当たり前手を振った  
ある朝あの子は来なかった  
緑色の顔をして寝込んで  
うすっぺらに白くなって  
白いおべべ着せられいった  
もう会えない遠いところ  
その子とこの子とあの子とその子と  
大水の雨上がりに遊んでいた  
その子は足を滑らして濁流に飲み込まれ  
ばたつかせた手と顔は流れる丸太に見えなくなった  
今頃きっと海にいる  
この子とあの子とその子とこの子と  
日暮れまで遊んでいた  
カラスが山に帰る頃かあさまが呼びに来る  
なのにこの子はお迎えなくて帰れない家までの道  
しばらく預けられていたけれど  
うつむいた顔のまま夕焼けにいなくなった  
あの子とその子とこの子とあの子と  
兆しに気づかぬふりをしてわらべ唄うたっていた  
あの子は花嫁衣裳着せられて  
初めての紅引いて車にのせられおひめさま  
綺麗な姿に悲しくなった  
その子とこの子とあの子とその子と  
いつも仲良く遊んでいて  
また明日来ることを当たり前手を振った  
その晩とても乾いた冬で木々のざわめき擦れる音  
胸騒ぎはどこからか大きくなり火をつけた  
赤く繫いだ手はかたく風に増す一連の禍（うず）  
そうして誰もいなくなった  
紙風船は焼け跡を風に攫われ宙に浮く  
ひとつ、ふたつ、みっつ、いつつ

私は誰だったのか

色のない白だけが影を引く